

戦後今からおよそ 60 年前、隅田川の川開き花火大会が再開され、我が家には 20 人くらい乗れた漁船があったので近所、友人を誘って両国あたりまで船を乗り入れて、当時としては珍しい花火見物を何年か続けた記憶があり、暗い戦後の夜空を明るく彩った花火は大きな希望と夢を与えてくれたような想いがありました。

私事で恐縮ですが、今日 8 月 17 日は亡き妻の月命日… 昨年の 7 周忌から、この夜は親しい人達が我が家へ集まって下さり「線香花火の会」をしてくれます。木立化した広い庭のあちこちで「チンチラ チンチラ」と火花を散らして童心にかえった歓声が上がります。庭いっぱい立ち込めた煙の向こうに母や祖母の顔が見えましたと涙をこぼしてくれた人々…。

人間の幸せとは、「母や家族の顔がいつも近くに見えて、子供達のにぎやかな声が聞こえる安心感」であります。近代社会、グローバル化、段々と家族の音が聞こえなくなって、無縁社会が暗く広がっております。

今年は 8 月 1 日の市原市民祭りを初めに、亀山の花火、いやさか踊り、湊川灯籠流し、木更津みなと祭り花火大会、富津市民祭りを参加させてもらいました。

戦後、鎮守の森を中心とした豊穰、感謝、祈願の祭りから新旧住民の親睦交流融和を目的とした市民まつり、花火大会等へと変わり、凡そ 30 年となりました。地域のコミュニケーションとしての役割は「大」でありました。

市原の市民祭りも、団体炬火リレーを組み入れて市内 47 校凡そ 150 人の炬火リレーによって市民踊りが動き出しました。

湊川の灯籠流しも、川沿いに念仏講の方達が席を設けて、哀調おびたご詠歌が川面に流れると、6 百余りの灯籠が宵闇の中を下って行きました。まさに精霊流しでありました。

富津市民祭りの特徴は、休祭日でなく平日に祭りが行われた事でした。

進出企業の方達の参加が多くなり、平日の方が参加しやすい… が原因でした。

花火大会の共通した問題点は寄付の減少であります。花火大会は主催者の予算に合わせて花火業者が企画見積もりをし、通常約 1 時間数十万円から数千万円までのお金がかかると言われております。

最近デフレ不況の続く中で、花火大会を支えてくれた地域の中小企業から寄付協力が難しくなり、我孫子花火大会は、昨年中止に追い込まれました。隣市木更津みなと祭り花火大会も有料観覧席を凡そ 3 千席設けて苦心されています。花火大会は無縁社会をこれ以上作らない為にも、地域のコミュニケーションの場として極めて重要であり、その市（まち）、市民の心意気の表現であります。

まち作りは、この市に住み、働き、営業するすべての人の共有のものであります。

寄付内容を拝見しますと、寄付の多くは地元中小零細業や一般市民の方で、大型店、コンビニ、レストラン等の大型チェーン店の寄付協力等が極めて少ないことであります。

大型店等の再考を促すと共に、行政・議会へと働きかけて「商業振興条例」を設置して頂き、花火、祭りに限らず、まち作り、市民奉仕へと共に参加協力を義務付ける様に願っております。

会員の皆様方にも「商業振興条例」につきご協議を頂き、成立へのご協力をお願い申し上げます。

